

歴史と原論（歴史、思想・哲学）

小田切 毅一（新潟医療福祉大学）

佐橋 由美（大阪樟蔭女子大学）

要旨

1996年以降のレジャー・レクリエーションの歴史および思想・哲学分野に関する研究動向を考察するために、主に日本レジャー・レクリエーション学会における研究成果を対象にこの間の論議を集約したが、この分野の研究は少数に過ぎず、研究動向についても必ずしも明らかにできなかった。

時代を振り返って、第二次世界大戦後にレクリエーションがアメリカから移入された時代や、高度経済成長に伴ってレジャーがブーム化するに至った時代には、レジャーやレクリエーションの定義づけやそれらの意味論とか機能論をめぐる学問的関心は、比較的明確で旺盛であった。しかし低成長へと時代が経過して以後の昨今に至っては、むしろ停滞・希薄化しつつあるようだ。

レジャー・レクリエーション研究が時代に伴い変化し、多様化する傾向をみせている一方で、歴史的関心や思想性、哲学的思考に関わる領域は、どのような研究課題や役割を担えるのであろうか。昨今における、一見すると後退ともみなし得るこれら分野の研究状況は、これからのレジャー・レクリエーション学をどのように性格づけることになるのだろうか。あるいはまたこれらの研究分野に代わる、新たな代替分野の研究関心によって補われ、刺激・誘発されつつ展開することは可能なのだろうか。

もとより歴史や思想・哲学分野の研究には、いわゆる科学（サイエンス）の成果というべき関連分科科学から提起される諸原理を包括・融合するようなヒューマニズムに基づく意味論や認識論、あるいはあるべき理念を提起することが期待されてきた。端的に言えば、科学論的分析に対座する人間論的視座という関係なのかもしれない。学会活動の充実した展開を期して、研究対象への学問的関心をどのように構築・共有するかも問われている。

第1章 テーマに関わる背景と目的

1990年代後半以降の少子高齢化時代にあって、新時代への取り組みを示唆するようなレジャー・レクリエーションの対象概念の論議や、これと連結した思想や思想・哲学的な論考は、余り盛り上がりを見せない。だが情報化社会到来の当然の帰結として、レジャー・レクリエーション関連の情報は以前とは比較にならぬほど巷に溢れている。レジャーやレクリエーションも、高福祉に通じる生活全体の質の問題に他ならず、より普遍的で一般的な生き方の問題として把握されつつある。普遍的な生き方がレジャーやレクリエーションと関わるという意味では、むしろ時代に先行する思想性やオリジナルな知見よりも、日常的で普遍的な実践行動にかかわる論議を誘発させるのだろうか。「パースペクティブ」とか「パラダイム」といった科学的な分析ツールと結びつく理論や、人間の心理・内面に接近する生活行動理論などへと関心が向けられるのだろうか。

第2章 レビューの方法

1996年以降のレジャー・レクリエーション研究の歴史および思想・哲学分野に関する研究動向を把握するために、①学会誌「レジャー・レクリエーション研究」（以下「学会誌」と表記）に掲載の論文など、②レジャー・レクリエーション学会大会における研究発表など、③当学会以外でのレジャー・レクリエーションの歴史および思想・哲学分野に関する研究成果などを対象とする。

〔Ⅲ〕特別企画「レジャー・レクリエーションの研究をめぐる動向と将来展望」

①については、1996～2010年に刊行された「学会誌」（第33号～第64号）に掲載されたa)研究論文（原著論文・研究資料・実践研究）、b)論考（特集寄稿・評論・紹介報告記事等）、c)講演・シンポジウム・公開討論会等記録など、すべての掲載内容を分析対象とする。②についても同様で、具体的には、第26回大会から第39回大会までの計14回の学会大会におけるすべての研究発表（「学会誌」第34号～第63号の学会大会発表論文集に収録）を対象とする。

考察にあたっては、①と②について取り上げられた当該領域の論文や研究発表を、以下の5領域に類別することによって、領域内での発表数の経年推移などから研究動向を把握するとともに、特徴的または代表的な研究、研究の方向性などについて考察する方法をとる。なお、＜領域1＞の実際の呼称は「歴史」、＜領域2＞は「思想・哲学・理論」、＜領域3＞は「レジャー・レクリエーションの理念・原理」、＜領域4＞は「レジャー・レクリエーションの概念・イメージ論」、＜領域5＞は「比較研究・関連周辺研究」である。

＜領域1＞から＜領域3＞が、いわゆる文献研究によるこの分野の中核部分と考えられる。

③については、当学会の活動範囲外場で公表された研究成果をレビューするものであるが、公表されたこれらの諸成果については、時間的制約もあり、全般に目を通すことはできていない。ここでは関連文献や論文を、ごく恣意的に取り上げるにとどめたい。

なお、主に第3章で取り上げる学会誌掲載論文・論考ならびに学会発表については、紙幅の都合により、研究者名や発表・掲載年を示すなど同定が可能となるよう記述を工夫したので、文末文献リストへの記載を割愛している。

第3章 先行研究の特徴や動向

1. 当学会における歴史、思想・哲学分野の研究成果

表1は「学会誌」に掲載された当該分野の掲載論文・論考を類別して、その配分状況をみたものである。表の最下欄には、各領域の研究論文・論考総数と研究論文（原著論文・研究資料・実践研究等）（内訳①）に限定した場合の合計論文数を示した。1996～2010年の間に「学会誌」に掲載された論文・論考等の総数は109であり、そのうち研究論文の総数は約半分の54である。ただし研究論文数（①）に限定すると、＜領域3＞の「理念・原理」や＜領域4＞の「概念・イメージ論」は特に少なく、後者が1という状況にある。比較的、一定量論文・論考を掲載している分野は＜領域1＞の「歴史」と＜領域2＞の「思想・哲学・理論」であるが、それでも前者5、後者6で、合計11に過ぎない。＜領域5＞の「比較研究・関連周辺研究」の研究数は最も多いものの、論文数（①）に限定すると、＜領域1＞や＜領域2＞と同程度になる。

表2は、1996～2009年度の学会大会における研究発表のうち、歴史および思想・哲学分野に相当する当該分野の研究数を、同様に5領域に類別して示したものである。14年間で400題の研究発表が行われたが、その中で歴史および思想・哲学分野の発表数は105件と約4分の1を占めていた。25%強に相当するこの数字は一見すると、むしろ多数ともみなし得るが、ここには＜領域5＞の「比較研究・関連周辺研究」33件が含まれており、その分、数値が大きくなっている点に留意したい。

以下は領域ごとに捉えた研究成果やその動向である：

まず、＜領域1＞の「歴史」については、掲載論文（表1）はいずれも通史もしくは総説としてではなく、個別史として記述されたものである。陳ら(1997)(2001)は、台湾におけるキャンプの発展過程を関係団体の動きとプログラム内容の変遷から明らかにしている。また、平野(2004)は、日本の黎明期のウィンドサーフィン普及というテーマに取り組んだ。堀田(2001)は、アメリカのセラピューティックレクリエーション専門団体による立法運動について、学会大会における研究発表をさらに深化・充実させて、研究論文として公表している。ちなみに通史的話題としては、小田切(1997)が、「レジャー・レクリエーションの史的変遷」と

表1. 学会誌「レジャー・レクリエーション研究」における歴史的、思想・哲学的研究および論考の推移

号	領域1	領域2	領域3	領域4	領域5	小計	比率(%) 小計/総数	総掲載論文・論考数	内 訳		
	歴 史	思想・哲学・理論	レジャー・レクリエーションの理念・原理	レジャー・レクリエーションの概念・イメージ	比較研究・関連周辺研究				①研究論文 (原著論文・実践研究等)	②論考 (特集寄稿・評論・紹介記事等)	③講演・シンポジウム・公開討論会等記録
第 33 号 (1996. 3)	0	0	0	0	0	0	0.0	5	4	1	0
第 35 号 (1996.11)	0	1 ①	1 ②	0	1 ①	3	50.0	6	3	3	0
第 36 号 (1997. 5)	2 ①③	0	1 ②	1 ②	1 ②	5	45.5	11	1	9	1
第 38 号 (1998. 3)	1 ②	0	1 ②	1 ①	0	3	42.9	7	1	6	0
第 40 号 (1999. 8)	0	1 ①	0	0	0	1	16.7	6	6	0	0
第 42 号 (2000. 8)	0	0	1 ③	0	0	1	50.0	2	1	0	1
第 44 号 (2001. 3)	2 ①①	0	0	0	1 ③	3	42.9	7	5	0	2
第 45 号 (2001.11)	0	1 ①	0	0	1 ①	2	66.7	3	3	0	0
第 47 号 (2002. 3)	0	3 ②②③	0	0	0	3	37.5	8	1	6	1
第 48 号 (2002.10)	0	0	0	0	1 ①	1	33.3	3	3	0	0
第 50 号 (2003. 3)	0	0	0	0	0	0	0.0	2	0	0	2
第 52 号 (2004. 3)	2 ①③	0	0	0	0	2	40.0	5	3	0	2
第 54 号 (2005. 3)	0	0	0	0	2 ③③	2	50.0	4	1	1	2
第 56 号 (2006. 3)	0	1 ①	1 ③	0	0	2	28.6	7	4	1	2
第 58 号 (2007. 3)	0	2 ①①	2 ③③	0	1 ②	5	83.3	6	2	2	2
第 60 号 (2008. 3)	1 ①	0	0	0	2 ①③	3	50.0	6	5	0	1
第 62 号 (2009. 3)	0	0	1 ③	0	3 ①①③	4	33.3	12	6	4	2
第 64 号 (2010. 3)	0	0	0	0	1 ③	1	11.1	9	5	2	2
	8 ①:5	9 ①:6	8 ①:0	2 ①:1	14 ①:6	41	37.6	109	54	35	20

いうテーマで、学会大会（第26回）で特別講演を行っている。

学会大会での研究発表（表2）に関しては、歴史的分野の発表は数的にも30と多く、また多彩でもあった。2002～2006年に研究発表の低調な時期があったものの、比較的コンスタントに発表が行われている。前半の活発な時期に公表された研究テーマの中には、文化史的な色彩を帯びた思想史という位置づけで、杉浦(1996)によるホイジンガの近代文明批判、寺島(1998)による英国レジャー政策の歴史的展開とその社会背景を考察した研究、アメリカ・レクリエーション運動の原点としてのマサチューセッツ湾植民地の意義を検討した研究（廣田・高橋、1998）、同じくアメリカ1900年代前半における女性スポーツ教育の理念を‘Play Day’の中に読み取ろうと試みた研究（荒井、1999）、アメリカにおける療法的レクリエーション専門団体による立法運動の展開過程を追った堀田の研究(1999)などがある。さらに、坂内(2000)は、近代日本における

〔Ⅲ〕 特別企画「レジャー・レクリエーションの研究をめぐる動向と将来展望」

表2. 学会大会研究発表における歴史、思想・哲学領域の演題数の推移

大会年	領域1	領域2	領域3	領域4	領域5	小計	小比率 (%) 総数	総発表数	うち、 ポスター発表の 数
	歴史	思想・ 理論・ 哲学	エ レ ジ ャ ー の 理 論	エ レ ジ ャ ー の 概 論	関 連 研 究				
第26回大会 1996年(第34号)	3	0	1	4	2	10	43.5	23	0
第27回大会 1997年(第37号)	4	1	1	0	3	9	30.0	30	0
第28回大会 1998年(第39号)	2	1	0	2	2	7	22.6	31	0
第29回大会 1999年(第41号)	2	1	2	3	1	9	33.3	27	0
第30回大会 2000年(第43号)	1	2	1	1	4	9	31.0	29	0
第31回大会 2001年(第46号)	3	1	2	0	2	8	29.6	27	0
第32回大会 2002年(第49号)	0	0	1	1	1	3	17.6	17	0
第33回大会 2003年(第51号)	0	2	1	1	4	8	30.8	26	0
第34回大会 2004年(第53号)	1	1	1	1	3	7	25.9	27	0
第35回大会 2005年(第55号)	0	1	1	1	3	6	31.6	19	0
第36回大会 2006年(第57号)	1	0	1	0	2	4	9.5	42	16
第37回大会 2007年(第59号)	2	0	0	1	2	5	22.7	22	7
第38回大会 2008年(第61号)	5	1	1	1	2	10	22.7	44	13
第39回大会 2009年(第63号)	6	0	2	0	2	10	27.8	36	16
	30	11	15	16	33	105	26.3	400	52

「初期」レクリエーションの理論を権田保之助の思想を手がかりとして探る取り組みを始めている。最近では西野(2006)(2007)(2009)が、明治、大正、昭和初期にかけて刊行された余暇・娯楽関連書籍等の歴史的史料を収集し、紹介する試みを行っている。また、古城(2007)は、昭和15年の東京オリンピック招致活動の政治的意味を考察し、小澤(2008)は、戦時期日本の「体力向上」の祭典—東亜競技大会—の様子を伝えている。このように、学会発表のレベルにおいては、「歴史」は種々様々なテーマで、研究成果が着実に公表されてきたといえるであろう。

<領域2>の「思想・哲学・理論」については、レジャー・レクリエーション研究に強い影響力を持つ2つの中核的な思想・理論に関する研究成果がみられた。すなわちホイジンガの遊び・文化論とチクセントミハイのフロー理論について、杉浦と迫が、これまで積み重ねてきた研究発表の成果を学術論文ならびに特集記事としてまとめている。1999年には、ホイジンガの、遊びや文化的要素の欠如したオランダ近代文明への批評について考察しており(杉浦・石川)、2002年には、「新しい時代における遊びと文化の方向性—ヨハン・ホイジンガを手がかりにして—」と題して、本研究領域にとって非常に重要かつ示唆的な論考を寄稿している(杉浦)。さらに、杉浦(2007)は、ホイジンガの近代社会認識を、同時代の遊びや娯楽を主たる手がかりとして明らかにした論文も発表している。一方、迫(2006)は、これまでのフロー研究の成果を「フロー体験の深化に関する理論的研究」の中に結実させている。その他に、レジャー・レクリエーションの思想・理論的研究分野で非常に影響力のある理論家、権田保之助の大衆娯楽思想を丹念に解説した坂内(2001)の研究も、重要な研究成果としてあげるべきであろう。

学会大会におけるこの領域の研究発表は11であり、他に比べると最も少なく、毎年0～2件の範囲で推移している。この理論・思想的な研究において目を引くテーマとえば、まずは上述したチクセントミハイ

のフロー理論とホイジンガの遊び理論である。なかでもフロー理論は、レジャー・レクリエーションの理論・思想的研究の中では、近年、非常に好まれるテーマとなっており、たとえば迫(2001)は、「スポーツと芸道におけるフロー体験の特性」について発表を行い、2004年には体育授業にフロー理論を適用し、授業をより楽しいものにする構想を公表している。また、マーレー(2008)も「フロー理論の構造と特質に関する基礎研究」と題して、理論的な考察を行っている。ホイジンガの遊びを中心とした文化論的思索に関しての研究では、何とんでも杉浦の寄与が大きい。2000年には、近年のホイジンガ研究の動向を、彼の近代文明批評を糸口に分析してみせ、2005年にはホイジンガの遊戯文化論をオランダ社会の近代化との関わりのもと考察した。「思想・哲学・理論」分野における2つの中心的テーマ以外では、服部(1999)(2000)(2003)が余暇社会における教養涵養の重要性といったテーマをめぐって、継続的に発表を行っている。

<領域3>の「理念・原理」に関する領域では、論文としてまとまった形で発表された研究がほとんどないのが現状である。この分野の貴重な文献としてあげることのできるのは、鈴木(1997)の特集寄稿「原論・歴史・本質論(レジャー・レクリエーション論)研究から」と、2006年、第35回学会大会で行われたシンポジウム「ダウンサイジングな時代に即応するレジャー・レクリエーション」の記録ぐらいであろうか。

学会大会における研究発表に目をやっても、レジャー・レクリエーションのあるべき姿について考察した研究の数は15と比較的少ない。この領域を主たるフィールドとしている研究者の中で、「21世紀を展望したレジャー・レクリエーション運動の課題と視点」「レジャー・レクリエーションの新しいパースペクティブとパラダイム」「レクリエーション観の確立」のように、レジャー・レクリエーションの理念・理想像構築に正面から取り組んだ数少ない研究者として鈴木(1996)(1997)、吉田(1999)をあげることができる。さらに、セラピューティックレクリエーション、社会福祉等のより専門的・分科領域における理念構築を試みた研究には、鈴木(1999)、茅野(2003)、滝口(2006)の研究がある。服部(2001)(2002)(2004)は、この分野においても独自の教育学的、人間論的洞察に基づいて、教養の重要性とレジャー教育の必要性、遊びの復権について積極的な発表を行っている。

<領域4>の「概念・イメージ論」については、1998年の西野・知念による経験標本抽出法を用いて、経験的にレジャー概念を定義する論文を最後に途絶えている。学会大会の研究発表においても16件と数は少ない。また、時期的に1996～1999年までの初期に発表が集中しており、この時期、研究のスタイルや志向性に流れの変化が生じたことを窺わせる。その端的な例として、西野らの研究グループや佐橋などが、北米で遡ること10年程前に開発された経験(標本)抽出法とよばれる手法を用いて、新しいタイプの概念・イメージ研究を展開した研究事例を示すことができる。西野らの研究グループ(1996)(1998)(1999)と佐橋(1996)(1998)は、従来の自由連想法などを用いたイメージ研究(高橋・高橋、1999;高橋、2002;武石、1999)とは異なって、実際の心理的体験を調査することによって、万人ができるかぎり最大の共通項で一致するレジャー・レクリエーションという状態を探索しようとした。しかし、短期間のピークの後、概念やイメージを論じる研究は、あまり行われなくなっていく。

最後に、<領域5>「比較研究・関連周辺研究」においては、レジャー・レクリエーション研究の質・グレード評価をめぐり、新たな自然科学的評価基準、評価方法の適用が提唱されるようになったことが注目点である。上岡・本多らの研究グループが、生理学・医学・疫学・療法・教育の領域で今日重視されるようになってきたエビデンスによる研究成果の評価というアイデアをレジャー・レクリエーション研究に導入し、将来的にこの領域の研究の質を向上させていくという主旨の論文・論考をいくつか公表している(2007)(2008)(2009)。この流れは、レクリエーションの身体的・心理的・教育的効果測定や、心理・社会学的領域のレジャー・レクリエーション研究だけでなく、歴史・思想領域の研究にも少なからず影響をもたらそうとしている。すなわち、自然科学的な評価基準や方法を導入しようとする流れが顕在化していく中で、理念的・思索的研究

固有の意義や役割はどこにあるのか、定位・明確化していくための研究努力が強く求められている。

2. 当学会以外での歴史、思想・哲学分野に関する研究の成果

まずレクリエーション運動史については、藺田による2007年の博士論文「日本レクリエーション運動史研究－時代相と運動の理念との相互関係を中心に－」¹⁾がある。2年後に公刊された藺田の『日本社会とレクリエーション運動』²⁾の冒頭（第一部）で、この論文の全文が掲載されている。また日本レクリエーション協会では、すでに1998年に『レクリエーション運動の五十年』³⁾と題する団体史を刊行していた。

この時期の思想的研究には、いわゆるホモ・ルーデンス論や余暇の分類論・文化論からの転換（心理学への接近）を思わせる動向もみられる。たとえばヨゼフ・ピーパーやヨハン・ホイジンガらの思想に触れた、小塩や松田らによる『暮らしの哲学としての生活文化』⁴⁾が1997年に刊行されたが、同時に1990年代には心理学者M. チクセントミハイによって公表されたフロー理論に多くの研究者が注目するようになった。1991年に今村浩明の翻訳による『楽しむということ』⁵⁾（1979年『楽しみの社会学－倦怠と不安を越えて－』⁶⁾の改題・再版）が、また1996年には今村の翻訳本『フロー体験－喜びの現象学－』⁷⁾が刊行され、2003年には今村浩明と浅川希洋志の編集で『フロー理論の展開』⁸⁾が、9人の執筆者からなる論集として刊行されている。国内外のフロー理論の文献リストも網羅されていた。その一論文である佐橋の「中年期女性の日常余暇場面におけるフロー」⁹⁾にも明らかのように、この理論はまさにレジャー・レクリエーションの思想的研究をも代替するような総合的な内的経験の理論ともなったようだ。こうした動向の中で2004年には、R.C. マンネルとD.A. クリーバーの著作が速水敏彦監訳『レジャーの社会心理学』¹⁰⁾として、本学会員らを含む11名の翻訳によって公刊されるに至っている。

歴史に関しては、稲垣¹¹⁾や野々宮¹²⁾あるいは小田切¹³⁾などをはじめ、ニュー・スポーツへの注目がなされ、ポスト・モダンをめぐる論議がなされた。また余暇（レジャー）史や余暇思想・哲学に関わる研究成果に目を向ければ、日本余暇学会が監修する『余暇の新世紀』¹⁴⁾が2002年に、また藺田による『遊びと仕事の人間学』¹⁵⁾もその2年後に出版されている。2008年に刊行された瀬沼の『西洋余暇思想史』¹⁶⁾は、古代ギリシャから現代までの余暇思想を3部に集約する労作である。またレクリエーション史に関しては、小田切による2007年の小論「遊びをせんとや生まれけむ－レクリエーション社会史序説－」¹⁷⁾がある。出生数と死亡数の相互関連に基づく経年的人口変動からみた、江戸後期以来の遊びと社会との新たな関係史の試みである。

第4章 今後の研究の課題とその方法論の展望

レジャー・レクリエーションの歴史や思想・哲学に関する研究動向は、ひとまず人々が生きるその時代や社会の、生活の質への問いかけから出発するものと言えるであろう。たとえば、レクリエーションが第二次世界大戦後にアメリカから移入された時代においては、終戦（敗戦）という政治的・経済的な拘束のもとで、アメリカ流のレクリエーション概念やその思想的受け入れが急務の課題として要請された。広範な分野から構築されるレクリエーション学において、多様な分科科学によってもたらされる科学的諸原理を統合・融合させようとする意味でも、ヒューマニズムの言論分野を明確に意識させた。

高度経済成長を背景にしたレジャー流行（ブーム化）の時代においては、レジャーやレクリエーションへの学問的問いかけは、豊かな生活とは何か、何のための豊かさかを問いかけることと密接なものであり、一層積極的に生活の質の問題を論議させることとなった。レジャーとレクリエーションの定義づけにしても、両者の関係論としてのいわゆる峻別論や補完論であり、あるいは生活構造論や労働と余暇の弁証論としての論考なども含めて、種々様々に論議された。

だがその後の低成長の時代を経て、昨今の高齢化や少子化、あるいは福祉や介護を強く意識する時代を迎えるに至ると、新たな生活に向けての時代的取り組みを示唆させるようなレジャーやレクリエーションの対象概念の論議や思想的・哲学的な論考は、むしろ余り盛り上がりを見せなくなった。学会会員の多数は理論的論考というよりも、実践的で科学的なミッションに基づく種々の分野の研究に着手しているが、こうした状況も情報化社会到来の当然の帰結とみなすことができるかもしれない。以前とは比較にならぬほど溢れ出している大量のレジャーやレクリエーションに関連する情報の勢いは、専門学会に所属している我々に、情報への吟味や学問的評価の暇すらも与えない程である。

専門職や専門用語の成立とも密接なレクリエーション運動への学問的関心も、たとえば「町興し・村興し」といった地域や地方の事例的・実践的な運動研究としては広がりを見せつつあるが、思想・哲学的論議としては、いわゆる行政主導の政策イデオロギーを後追いする以上には、レジャーやレクリエーションの概念の再検討を先導するものにはなり得ていないようだ。

本書の「医療と福祉」の冒頭でも言及しているように、1990年代後半以降は、たとえば「科学的根拠に基づいた (Evidence-Based)」医療や健康政策が強調される傾向にある。こうした時流と呼応するレジャー・レクリエーション研究では、たとえば統合論より分析論への傾斜とか、概念論からシステム論への傾斜とか、新たなツールの提案や模索を色濃くさせるもので、確かに科学的根拠を重視しつつ研究関心が大きくシフトしつつあるようにも思われる。

応用的で総合的、広範な分野の科学的分析による数値化やシステム論化は、もとより人間の生きる問題を客体化し、抽象化・モデル化させることに道を開く。だがその一方で、本来的に人間的なものに根ざした、人間的営みであるレジャー・レクリエーション問題の研究において、本質的な生きることに関わるヒューマニズムの学問的視野をネグレクトする傾向をも生じさせるというのであれば、それは何とも矛盾に満ちた皮肉と言わざるを得ない。

本学会の会員総数における当該領域で研究成果を公表しようとする会員数に着目しても、漸次的に少数化する傾向にあるようだ。何らかの専門的な領域を持つ会員の集合体である学会組織にあっては、この種の動向も時代を反映するひとつの結果として受け入れざるを得ない。しかしながら、時代に対応し先導する普及・啓発に向けての学会活動の機会を通じて、必要に応じレジャー・レクリエーション学における歴史や思想・哲学分野の存在意義を再検討すべく、歴史や思想・哲学に関わるこの研究分野や、すでに指摘したフロー理論のような、いわゆる時代に対応するヒューマニズムの学問的視野における論議に基づいて、「再構築」や「脱構築」がなされる必要があろう。

すでに1997年の「学会誌」の特集（「レジャー・レクリエーション研究における基本書」）の中で、鈴木会長は「原論・歴史・本質論研究の分野」について、以下のような発言をしていた。「余暇を単なる遊びでもなく、仕事でもない、創造的な活動としてしっかり捉えるなら、……レクリエーション観の正しい位置への啓蒙・普及は学会としても決して避けて通れぬ道であろう。……（中略）……概念の“ぼやけ”いわゆる“曖昧さ”をいかに明確に浮き上がらせ、レジャー・レクリエーションの本質論をあきらめずに着実に確立していく努力（研究）をしていくかということであり、……“あるべき論”の提言を明確にして行かなければならない。」こうした課題意識はまた、本誌巻末の総論（「未来への羅針盤」）における、以下のような指摘にも連動しているにちがいない。すなわち「今後は、学会の研究領域のすべてを学会員の個人研究・共同研究のみに委ねるのではなく、領域の広がりや研究活動が積極的あるいは十分でない領域、また、新たな領域や時代の要請に応える研究課題等にメスを入れ、学会主導の研究共同プロジェクトの立ち上げ等も視野に入れ……るなども一考すべきである。」学会の今後の研究推進への取り組みに期待したい。

参考文献

(主に第3章で取り上げた学会誌掲載論文・論考ならびに学会発表については、紙幅の都合により、研究者名や発表・掲載年を示すなど同定が可能となるよう記述を工夫したので、以下文献リストへの記載を割愛している。)

- 1) 藪田碩哉、日本レクリエーション運動史研究－時代相と運動の理念との相互関係を中心に－、日本体育大学、体育科学博士論文、2007。
- 2) 藪田碩哉、日本社会とレクリエーション運動、実践女子学園学術・教育研究叢書19、実践女子学園、2009。
- 3) (財)日本レクリエーション協会監修、レクリエーション運動の五十年－日本レクリエーション協会五十年史－、1998。
- 4) 小塩節・松田義幸他、暮らしの哲学としての生活文化、PHP、1997。
- 5) M. チクセントミハイ、今村浩明訳、楽しむということ、思索社、1991。
- 6) M. チクセントミハイ、今村浩明訳、楽しみの社会学－倦怠と不安を越えて－、思想社、1979。
- 7) M. チクセントミハイ、今村浩明訳、フロー体験－喜びの現象学－、世界思想社、1996。
- 8) 今村浩明・浅川希洋志編、フロー理論の展開、世界思想社、2003。
- 9) 佐橋由美、中年期女性の日常余暇場面におけるフロー。(今村浩明・浅川希洋志編、同上書、214 - 240、2003。)
- 10) ロジャー・C・マンネル、ダグラス・C・クリーバー、速水敏彦監訳、レジャーの社会心理学、世界思想社、2004。
- 11) 稲垣正浩、ニュースポーツ論議の意味。(野々宮徹他編、近代スポーツの超克－ニュースポーツ・身体・気－、叢文社、1-20、2001。)
- 12) 野々宮徹、ニュースポーツ登場の背景。(野々宮徹他編、近代スポーツの超克－ニュースポーツ・身体・気－、叢文社、54-62、2001。)
- 13) 小田切毅一、はじめに「軽スポーツ」ありき。(奈良女子大学文学部スポーツ科学教室編、やわらかいスポーツへの招待－軽スポーツを科学する－、道和書院、6-28、1998。)
- 14) 日本余暇学会監修、余暇の新世紀、遊戯社、2002。
- 15) 藪田碩哉、遊びと仕事の人間学、遊戯社、2004。
- 16) 瀬沼克彰、西洋余暇思想史、世界思想社、2008。
- 17) 小田切毅一、遊びをせんとや生まれけむ－レクリエーション社会史序説－。(小田切毅一他編、いま奏でよう身体のシンフォニー、叢文社、282-301、2007。)